

コロナ禍の中で、全国市長会での ご縁のありがたさ

あばしり

網走市長(北海道)

みずたによいち
水谷洋一



網走の流氷と知床連山

市長就任から13年、種まきの1期目、花と実の2期目、刈り取りの3期目と思いきや、新型コロナウイルス感染症の拡大で、ワクチン接種や医療確保など、終日対応に追われた3期目でした。

この難題に対し、懇意にしている全国各地の市長と、頻繁な意見交換をさせてもらい、悩みながらも同じ境遇の中で相談できる市長がいたことに、どれほど心強かったか計り知れません。

全国市長会で知り合ったご縁に感謝した日々でもありました。

役所では、この3年間に採用した職員の内容をマスク姿でしか見たことがなく、ふと

職場内でお会いしても、「あれ誰だっけ」ということも、ようやくマスクを外し、日常を取り戻す日も間近になってきたと感じています。

政治家を志して

政治家ってカッコいいと思いはじめたのが中学生の時。作家、戸川猪佐武の『小説吉田学校』を読み、それぞれの登場人物、それぞれの痛烈な個性と国を思う心、一つ一つの言葉に感じ入ってしまったのです。

そうだ、それには早稲田に入って雄弁会に入ることが、政治の道に進めることだと思ひ入学。「わが早稲田大学雄弁会は経国済民の志を有する学生の集まりであって…」と、声を上げていた頃、今思えば、もう少し勉強をすればと思うところですが、あの当時は「もう、いっぱいいっぱい」

現在、雄弁会出身の仲間の市長で、本庄市の吉田信解市長は私が5年生の時の1年生。豊橋市の浅井由崇市長は私の同期。特に吉田市長には先に当選された市長の先輩として、コロナ禍にあつてさまざまなご指導をいただきました。ありがたいことです。大学を卒業して就職したのが、北海道農協中央会。

当時は牛肉オレンジ交渉や、ガット・ウルグアイ・ラウンド交渉の農産物12品目自由化交渉など、農政が大きく動いていた時でした。



雄弁会主催の新人大会において審査員を務める筆者(左端)

政治の舞台をS席で見たい、できることなら政治の舞台の袖で、キュー出しの仕事をしてみたい、そんな思いからの就職先でした。

当時、農産物自由化阻止に向け、街頭に出て激しく抗議行動を行っていたのは、農協青年部の皆さんでした。私は事務局の1人として、これら運動に携わり、その時、先頭に立っていた農協青年部の幹部は、その後、各農協の組合長となり、中央会や各連合会の役員となるなど、共に歩んだ仲間として、今も農業情勢の意見交換など、親交をいただいていることに、人の縁のありがたさを感じています。



オホーツク網走マラソンにて参加者を応援する筆者

そんな政治の季節の中、平成5年に細川内閣が誕生し、日本の政治の変化を目の当たりにします。当時は最終バスが出たと表現され、このバスに乗り遅れるのは、政治の舞台から遠ざかってしまうとの思いを募らせた時期でした。

結婚して1年数カ月、5カ月の息子がいるながら、北農中央会を退職し、地元網走に戻り道議会議員選挙に出馬。完膚なきまで打ちのめされ、落選。当時31歳。次の希望を見いだせない日々が続きました。

そんな中、地元選出衆議院議員の武部勤先生から声が掛かり、公設秘書として政治のイロハを学ばせていただきました。

現在、御年80歳を超える武部先生は、現役中と変わらぬ活躍に、きつとそれは「食べられているのが違うのだ」と思うくらいお元気で、時間を見計らってはご機嫌伺いかたがたご指導をいただいています。

オホーツク網走マラソンが全国1位に

その後、網走市議会議員に当選。3期途中で辞職し、平成22年、網走市長選挙に出馬。当選をさせていただいて、現在4期目。

オホーツク網走マラソンを

開催することは、平成22年に初当選した時から公約に掲げていました。

私はサロマ湖100kmウルトラマラソン50kmの部で8回と、フルマラソンを4回完走。大会を開催するには、ランナーの気持ちに寄り添った大会にしたいとの思いを強く持っていました。

平成27年から始まったこの大会で、私はスタートの号砲はもちろん、ゴール前に立ち、全ランナーのフィニッシュを見届けています。

私自身、走力がないので、「がんばれ」の声援が、最後の一押しとなることを知っています。またこの大会で目指したものは、スポーツツーリズムにつながるような、網走の景観や食を楽しんでもらう大会にしたということでした。

ゴール会場には、大会当日に満開となるよう260万本のひまわり種をまいています。雨が続きと、開花のタイミングが合うかひやひやします。

4km地点のエイドステーションでは「かにの鉄砲汁」を提供しています。

序盤から汁物が出たら「タイムが狙えない」と言われることもありませんが、とにかく楽しんでもらうことを一番に考えた大会です。



サロマ湖100kmウルトラマラソン

エイドは他に、従来の「ものまねエイド」に加え「大阪のおばちゃんエイド」を設けました。走りながら「クスッと笑える」ポイントは必要です。

そうしたこともあり、2022年のランニングのポータルサイト「ランネット」の参加者評価で、フルマラソンの部で全国1位の評価をいただきました。

昨年は、3年ぶりにリアルでの大会を開催しましたが、参加者は減少しました。ただ、オンライン参加者もあり、合わせると2300人。

オンライン大会を通じて多くのランナーに知っていただき、いずれはリアルの大会に参加してほしいと願っています。

これからも、網走の魅力を十分に発揮して、地域の活性化に資していきたいと思えます。